

(2) 家称語彙

家称語は、屋号ともいう。当地では、「ヤゴ」の名称が一般的である。

屋号語彙の命名構造

当町には、いろいろな特徴を持った屋号が存する。それらを命名の観点に従って、その一部を整理してみると、次のようになる。

1 居住場所に注目した家号

a 地形に基づくもの

サ|コ (山の迫っている所にある家) カ|ケ (山の際にある家)

タ|ナカ (田中) タナカヤ (田中屋)

b 位置に基づくもの

ニ|シ (本家の西にある家) 一般称アクセントは「ニ|シ」

ソ|ラ (本家よりも高い台地にある家) 一般称アクセントも「ソ|ラ」

c 目標物を言うもの

イ|ズミヤ (泉屋) シ|ロモト (城本)

2 家に注目した屋号

a 本家・分家を言う名称による屋号

ヘ|ヤ (部屋) ミ|セノ デー (店の分家)

第一章 熊野町におけることばの生活―方言―

I 生活誌編

ミセ| (店) シンタク| (新宅)

b 家の新古に注目した屋号

フルヤ| (古家)

ニーヤ| (新家)

アタラシヤ| (新しい家)

c 家の形状に注目した屋号

フキヤ| (葺家)

3 職業生業に注目した屋号

コーヤ| (紺屋) キジヤ| (木地屋)

カジヤ| (鍛冶屋) 一般称としては「カジヤ|」のアクセント)

イモジヤ| (鍛冶屋)

4 家の格に注目した屋号

トミヤ| (富屋)

5 縁起をになう名をもっている屋号

a めでたい呼称を取り入れたもの

○タマリヤ| (溜屋) カネミツヤ| (金満屋)

b 御大家の領域内にあったという意の「垣内」(カーチ)を用いたもの

マエガーチ| (前垣内) ヤマガーチ| (山垣内) フクガーチ| (福垣内)

V 商業のためにつけられた屋号

a 故事などによるもの

ボーユドー (仿古堂) イツキューエン (二休園)

b 姓、名の一部を利用したもの

コジョーエン (古城園 || 姓「城本」を)

ショーユードー (庄栄堂 || 名「庄三郎」を)

ヨーショードー (与正堂 || 名「与三郎」を)

これらVの類は、すべて、毛筆業の発達に伴ってつけられた屋号である。そのため、家によっては、別の古くからの屋号を別にもっていることも多い。たとえば、「庄栄堂」の在来の屋号は、「ヘヤ」であるといったものである。また、毛筆問屋として命名されている屋号には、「く園」「く堂」の文字が多く用いられていることも、一つの特徴である。

なお、当地には、その人の出身地やあるいはその人たちが一時住んでいた地名を屋号としている例は、見られなかった。また、「人名」そのものを屋号としたものもないようであった。

屋号の使用状況

ここでは、屋号が生きて使用されている状況を熊野町呉地区の十日講という隣保組織について、見ていくことにする。この十日講は、四七戸をもって形成されている。この隣保が十日講という、講中名をもっていることは、かつては、当地の中心的宗旨である浄土真宗本願寺派の講中の一形態から形成されて来たものであることを示しているといつてよからう。ところが、現在では、「ウレイ」についての講が働いていると、説明されている。すなわち、葬式とか火事とかの悲しいこと、辛いことについて機能する

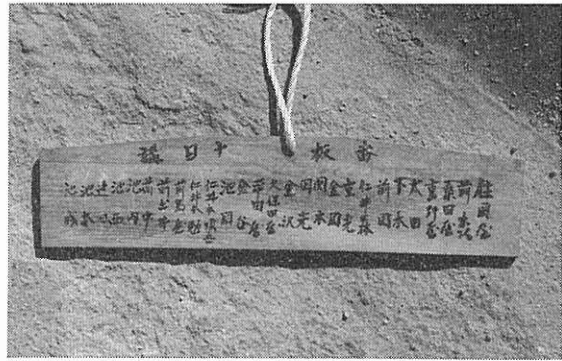


図1-4-3

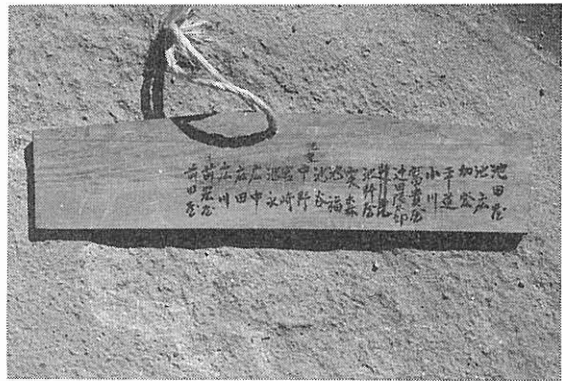


図1-4-4

互助組織であると説明されているものである。

十日講には、番板が用意され、一月ごとに組織構成員の家庭に継承されている。この番板には、各戸の屋号若しくは名字が記されている(図1-4-3、1-4-4)。この名字の順に月番が継承されていくことになり、月番は十日講の成員に不幸が生じた場合には、講中の人々の代表とし

て、不幸の生じた家に扶助の手をさしのべる仕事の代表になるわけである。番板に記されている名を書き、各家の名字(括弧内の名)との対比ができるように整理してみると、次のようになる。

住^ス 岡^カ 屋^ヤ
前^メ 森^シ (堂森)

重^シ 野^ノ 屋^ヤ
太^オ 田^タ (伊藤)

前^メ 岡^カ (前中)
仁^ニ 井^イ 森^シ (仁井本)

金^{カネ} 岡^カ (金谷)
岡^カ 本^ホ (堂森)
光^{ミツ} 岡^カ (堂森)

桑^カ 田^タ 屋^ヤ (椎木)

下^カ 本^ホ (川上)

重^シ 光^{ミツ} (伊藤)

岡^カ 光^{ミツ} (堂森)

これらのうち、「辻田隆太郎」家については、「辻光」の屋号が見せ消ちにされている。辻光の屋号が、なお一般化していないためかとも考えられる。辻田家は、幕末ごろ功勞によって藩主より辻田姓を与えられたというから、あるいは屋号を必要としない時期もあったのではなからうか。そのほか、姓のみの家が、「太田、川上、小川、実森、中野」の五戸がある。これらの家は、この講の中に若しくは近隣の講に同姓をもたない家である。そのため、姓をもって呼ばれることも多いかと思われる。「仁井森」の屋号をもつ「仁井本」には、氏名で表記されている二家がある。分家が新しいために、屋号をもっていないといえる。一戸しか講中には存在しない「椎木・細本」の家では、近隣の地域内に同姓が存在するとかというような状況から屋号を有していると思われる。このように、屋号は各戸を明確に識別するための方法として使用されたものと言える。

屋号と姓とが一致する家に、「前中、広田」の二家がある。十日講の組内より西の方に離れた所に、「前西」

前 ^{マエ} 土 ^ド 井 ^イ	前 ^{マエ} 島 ^{シマ} 屋 ^ヤ	仁 ^ニ 井 ^イ 本 ^{ホン} 勉 ^{ケン}	仁 ^ニ 井 ^イ 本 ^{ホン} 順 ^{ジュン} 吾 ^ゴ	池 ^{イケ} 岡 ^{オカ}	金 ^{カネ} 谷 ^{タニ}	平 ^{ヒラ} 田 ^タ	久 ^ク 保 ^ボ 田 ^タ 屋 ^ヤ	金 ^{カネ} 沢 ^ザ
(前中)	(前中)	(氏名)	(氏名)	(荒谷)	(金谷)	(荒谷)	(早田)	(金谷)
加 ^カ 池 ^{イケ}	池 ^{イケ} 田 ^タ	池 ^{イケ} 屋 ^ヤ	池 ^{イケ} 城 ^{シロ}	池 ^{イケ} 本 ^{ホン}	辻 ^{ツジ} 田 ^タ	池 ^{イケ} 西 ^シ	池 ^{イケ} 内 ^{ウチ}	前 ^{マエ} 中 ^{ナカ}
登 ^ト	広 ^{ヒロ}	屋 ^ヤ	城 ^{シロ}	本 ^{ホン}	田 ^タ	西 ^シ	内 ^{ウチ}	中 ^{ナカ}
(荒谷)	(荒谷)	(荒谷)	(荒谷)	(荒谷)	(辻田)	(花木)	(荒谷)	(前中)
池 ^{イケ}	池 ^{イケ}	実 ^{ジツ}	池 ^{イケ} 野 ^ノ	辻 ^{ツジ} 田 ^タ	辻 ^{ツジ} 田 ^タ	富 ^フ 貴 ^キ	小 ^コ 川 ^{カハ}	平 ^ヘ 道 ^{ミチ}
谷 ^{タニ}	福 ^{フク}	森 ^{キリ}	城 ^{シロ} 屋 ^ヤ	辻 ^{ツジ} 田 ^タ	辻 ^{ツジ} 田 ^タ	屋 ^ヤ	川 ^{カハ}	道 ^{ミチ}
(荒谷)	(荒谷)	(実森)	(荒谷)	(辻光)	隆 ^{リウ} 太 ^{タイ} 郎 ^{ロウ}	(細本)	(小川)	(荒谷)
前 ^{マエ} 田 ^タ	前 ^{マエ} 宏 ^{コウ}	広 ^{ヒロ} 川 ^{カハ}	広 ^{ヒロ} 田 ^タ	広 ^{ヒロ} 中 ^{ナカ}	池 ^{イケ} 永 ^{エイ}	宮 ^{ミヤ} 崎 ^{サキ}	中 ^{ナカ} 野 ^ノ	池 ^{イケ} 重 ^{シウ}
屋 ^ヤ	屋 ^ヤ	川 ^{カハ}	田 ^タ	中 ^{ナカ}	永 ^{エイ}	崎 ^{サキ}	野 ^ノ	重 ^{シウ}
(前中)	(前中)	(広田)	(広田)	(広田)	(荒谷)	(早田)	(中野)	(荒谷)

の屋号を有していた家が、かつては存していた。「前中」の屋号はこのような時期の命名を反映しているかと思われる。「広田」は、屋号が姓となったものか。田の形状に由来する命名であることは、いうまでもない。そして、これらの二家の一族は、前者は「前」の文字を有し、後者は「広」の文字を有する屋号を派生させている状況がよくわかる。

一族関係にある家々が、同一文字を有していることは、「金谷」一族の「金」、「堂森」一族の「岡」、「伊藤」一族の「重」の字の場合にも認められる。また、「荒谷」一族のうち「池」の字のつく一族は、中でも多くの屋号を派生させている状況を見せてくれる。また、同一姓の「加登」の分家には、「平田屋」「平道」のように「平」の字が用いられている。これらの「岡、池、平」の字には、それぞれの屋号が形成された当時、それぞれの家の所在した土地の形状なり目標物なりを取り込んだ意味を利用した文字を用いているのではないかと考えられる。

荒谷姓を名乗る人々は、いずれも西条三永から呉市大積に移った、荒谷一族の子孫だと言っている。当町内に「亀」の字を有する荒谷一族もある。これらが、系譜上の血縁を有するものかどうかは、にわかにはわからない。しかし、現存するそれぞれの屋号をたどって行くと、「池」も「亀」も「加登」も七、八代前まで明らかにすることができる。こうしてみると屋号の成立は、約二百年前くらいから一般化したものと考えられることもできるのではなからうか。

屋号を、昭和二十年（一九四五）以降に付けたという例は、ほとんどない。それ以後に命名されたものは、すべて毛筆業に新たに参画した家であった。一般の家庭で屋号を付し、それが一般化したと見られるものは、ほぼ昭和四・五年（一九二九・三〇）ごろまでのものである。屋号が家称として生きづいていたのは、このころまでであるといつてよからうか。